



このコーナーは県出身者で各界で活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などを聞き取るものです。

地名は財産です

●民俗学者 谷川健一

楽しかった水俣時代

水俣町（現在の水俣市）生まれなんです。海岸町で当時は汽車も通らないというところで、しかも熊本県と鹿児島県の県境で孤立した環境でした。ですけど熊本市に比べますと海辺ですから気候は非常に温暖でしてね、夏は涼しくて冬は暖かいそれも正月を過ぎて二月頃まではちょっと寒かったんですけど、二月末になりまずと春雨のような雨が音をたてて降りましてね、急に暖かくなるんです。まあそういうことで私も小学校に通う時代まで非常にのびのびと水俣で過ごしました。水俣川という川が流れていて、そこはいい風景でしてね、泳ぎもすれば橋の欄干から網を打つような人がいたりしましてね。それから冬になると長島からみかん舟が来るんですよ。そして水俣川の橋のとき

東京お茶の水のホテルで、谷川健一氏にお会いすることが出来た。講演に執筆活動にと全国各地を精力的に奔走されているからであらうか、それとも、黒々とした髪に、がっちりした体格だからであろうか、非常に若々しい感じがした。「地名を守る会」の創設者で、「古くて新しい地名」は日本の伝統のいわゆる岩盤に通じるもので、是非守らねばならないと語る。

ろにお姿さんがむしろを敷きましてね、むしろの上に山のように島みかんを積み、柵で計っていわゆる計り売りをするんです。私達はそれを買に行ったりしたんですが、そんなこんなで水俣にはいい思い出がたくさんあります。

医者家庭

私の父は熊本医専で眼科を勉強しまして、その後水俣で開業したんです。当時の水俣は、日笠（現在のチッソ）があるもんですから新興の都市でしてね。だけど陸路は鉄道がないものだから、三太郎峠を馬車で越えるしかなくて、荷物は松橋から牛深を回り、海を渡って水俣へ送ったといっていましたね。藩政時代、薩摩藩は入国をやかましくいってまして、そういうふうには水俣は声北郡の中での袋小路のようなところにあつたんですね。

時代といえば、尊敬していた山崎貞士先生のことを思い出します。山崎先生は一年から三年までの担任の先生で、少年期で思想的にも状況的にも伸びてゆこうとする時に、そういう本（文学書等）なんか読んでみても非常に理解のある人でした。

残酷物語

東大文学部を卒業後平凡社へ行ったのは、偶然のきっかけでした。編集者になろうとは夢にも思わなかったんですが、何か職に就かなければなりませんから入っただけのことなんです。結果として考えますと、いくらか編集の才能に恵まれていたんでしよう。「風土記日本」とか「日本残酷物語」とか作ったんですね。『日本残酷物語』というのは、ちょうど一九六〇年代の安保闘争の頃でしたね。あれは大変評判になりました。残酷物語という言葉が流行語になつたくらい

です。それから「風土記日本」もよく売れました。それで次に雑誌「太陽」をつくりました。これは一九六二年頃でしたか、以前から下中邦彦社長がグラフィックな雑誌を作りたいと考えてまして、ちょうどいい時期でした。というのは、当時平凡社は百科事典が中心だったんですが、国民百科事典がすぐ売れたんです。セットで六十万部位売れて、純益が随分あつたんです。それで、純益の半分は税金になるということでした。ところがそれを先行投資すればね、つまり次の企画に投資すれば税金を納めなくてもいいということですね、それじゃあ何か雑誌をやろうということをお願いしたわけ、「太陽」という名前は後でつけたんですがね。家庭のだけれども読めるような雑誌でした。私に「太陽」編集長の白羽の矢が立ちましてね、当時雑誌「太陽」の編集部は社員だけでも三十四名位いました、その他出入りするカメラマンやレイアウトをす

兄弟は六人、私が長男でして、弟が三人妹が二人いてまあ賑やかなもんでした。当時は田舎医者でしたけれども、金に困ったという経験は小さい時一度もなかったというのは幸福だったと思いますね。戦後は苦労しましたけれども子供の頃はまあそんなでした。

白紙答案

私の行った熊本中学というのは当時から名門校として、受験校なんですよ。四年生から受験組というのができて、とにかく厳しかったですよ。私は南千反畑町の母方の祖父の家に住んでたんですが、近くに県立図書館があつて、そこに入り浸りて学校以外の本、例えば文学書とか思想書ばかり読んでいました。知事の沢田くんとは同級生だったんですが、彼も文学青年でした。藤本くん（副知事）はまた、士君子という少年の頃から英国紳士みたいでしたよ。とにかく、熊中には厳しい校則があつて、文学書など読んではいけなかったし、図書館も特別な理由がなければ行ってはいけなかったんです。それで最初は成績が良かったんですが、だんだん悪くなってきてね。ちょっと勉強すると上がるけど、また勉強しないと下がるというような状況を繰り返してました。ところが私の両親は実に生真面目でして、長男だからなんとかして医者にならせたいというわけですね。是非医者になれというでしょう。「旧制高校の理科へ行って医者を続け」とね。私はもう文学なんかやってるから医者になる気がだんだんなくなってきました。それで、五高に白紙答案を出して来ましてね。一年後に浪速高校（現在の大阪大学）の文科の方へ行つたんです。中学

最後の攘夷党

私は「太陽」をやっているうちに病気になる、準備期間を含め二年しかやらず、参与という閑職に就けて貰いました。その時に暇になつたので、何かやろうと思って書いたのが「最後の攘夷党」なんです。大変面白い話で、要するにぎりぎりのところへ追いやられた人間はね、どちらにつけば後悔しないか、大変な心労があるんですね。そういう問題を取り上げたんですが、それがたまたま大仏次郎さんの目に止まって、実は大仏次郎さんとは面識がなかったんですが、向こうから手紙が来たんです。その後大仏さんの推薦で入選してきました。直木賞候補に上がったのは、私の他に五木寛之氏や結城昌治氏それに立原正秋氏でしたが、結局その時は立原氏が受賞しました。そのような直木賞候補の頃、病気になるって一年半位入院したのをきっかけに、四十五歳でしたが、会社を止めて物書きをしたと思ったんです。

企業と文化とPR

現在行政は文化であるとか、企業は文化であるとか言われているのですが、色々な企業が文化的なイメージを与えようと盛んに努力してるわけですね。そういうことで、実は私、日本地名研究所を作っているんですが、昨年の十月七・八日には新潟日報と共同主催でシンポジウムを新潟市でやりました。その時バックアップしたのが、ある広告代理店です。そこは企業か



谷川健一

●大正十年七月、水俣町（現水俣市）に生まれる。
●熊本中学から浪速高校（現大阪大学）へ進み、東大文学部卒業後平凡社入社。
●「風土記日本」「日本残酷物語」等の編集を手がけ、昭和四十三年から評論・執筆活動に入る。
●民俗学者、評論家、日本地名研究所所長。